

グリーンサークル37号

クローズアップ
活動団体紹介
講座紹介
多摩市みどりのかわら版

中山 茂樹
森木会クラフトプロジェクト
ロケットストーブ講座
會田 勝康



モミジイチゴ

～クローズアップ～

多摩発「シノダケ・ヒンメリ」の話

なな山緑地の会 中山 茂樹

シノダケと聞いて分からない人はいないと思うのですが、シノダケ・ヒンメリと言われるとなんのことだか分からない人が多いと思います。シノダケは多摩のどこにでも生えているアズマネザサのことで、めかひの材料となって生活を支えたことを除くと、多くの人には山や畑の厄介者ぐらいの認識ではないかと思ます。その厄介者を活用できないかと考えて始めたのが、北欧フィンランドの「ヒンメリ」という伝統的な麦わらを使った装飾品でした。素材をシノダケとすることから「シノダケ・ヒンメリ」と名付けました。

シノダケは素材としてたくさん山にあり、本家の麦わらと違って頑丈です。頑丈が故に、誰でも細工が出来て、形も三角形のトラス構造を組むことで様々な造形を作り出すことが出来ます。経年で色も変わって、麦わらほどではなくても黄色く輝きます。自然素材の持つ柔らかな質感が魅力です。

なな山緑地の会でシノダケ・ヒンメリの作品（飾り）を作り始めて3年ほど経ちます。これまでの間、多摩エコフェスタでの展示や作品作りを楽しんでもらうイベントなどをしてきました。そんな中、昨年末の多摩市立グリーンライブセンターでのクリスマス飾りに参加する機会を得ました。ワークショップに延べ50人ほ

どが参加し、200個程の小さな作品が作られ、恵泉女学園とのコラボレーションを果たしました。多摩でしか観られないステキなクリスマス飾りになっていたと思います。



中山 茂樹氏

これまでの活動を経てみて分かったことですが、シノダケ・ヒンメリの作品を作ってみたくてという人が多いのですが、いざ始めようとすると、シノダケ集めが出来ません。自由にシノダケを刈る場所がなく、材料の提供に里山の協力が欠かせません。一方、多摩の公園の一部にはヒンメリに向けたシノダケがたくさん生えています。ヒンメリを普及させると、里山や公園の整備と作品作りの一挙両得になるはずですよ。

そんなうまい話にはなかなかならず、現在は、少しずつ一緒に楽しむ人を増やそうとしているところです。進めるほどにシノダケでのヒンメリづくりに可能性を感じます。ほぼ材料費が掛からず、形も大きさもかなり自由、独創的なものも造れそうです。ほぼ唯一の欠点は、根気がいることでしょうか。私の置かれている状況と同じということでしょう。たくさんの方が楽しむ姿を夢見しています。今年は、一年を通して、グリーンライブセンターでシノダケ・ヒンメリを飾り、来館者に創り出す景色を楽しんでもらいたいと考えています。

シノダケ・ヒンメリ

・「シノダケ・ヒンメリ」に関連する記事は、検索「なな山緑地の会活動記録」

<https://nanayamaryokuchi.blog.so-net.ne.jp/>をご覧ください。

・「シノダケ・ヒンメリ」についての問い合わせは、下記アドレスまでメールいただくか、多摩市立グリーンライブセンターまでお願いいたします。

shinodake-himmeli@nanayama@nifty.com

多摩市立グリーンライブセンター 電話 042-375-8716



グリーンライブセンターだから可能となった、素敵なクリスマス空間

～活動団体紹介～

森木会クラフトプロジェクト

どんぐり山を守る会 細川 正男

森木会のクラフト好きなメンバーが、活動団体を越えて、「クラフト」を通じて活動を行う「森木会クラフトプロジェクト」も3年目に入り、2019年度の活動を無事終えようとしています。

5月子どもまつり 竹笛と竹ぼっくり製作

竹笛と竹ぼっくりの2種類を製作しました。

竹笛は、胴体部分となる太い篠竹(長さ約7cm、直径2cm)の表皮の一部を削り、平らな面を作って穴を開け、その穴の縁に吹き口となる細い篠竹(長さ約6cm、直径約1cm)を接着剤で固定します。最後に太い篠竹の先端部分の上に短い篠竹(長さ3cm)を接着して完成です。

当日は、胴体に開けた穴の淵に吹き口から空気がうまく当たらないと音が出ないため、細い竹を吹きながら子供達に位置や角度を何度も調整をし、スタッフが接着し渡すと、竹笛はどれも綺麗な音色でなり、皆大喜びでした。



5月子どもまつり 子供たちも興味津々

12月クリスマスナイト 竹灯籠製作

クラフトプロジェクトも竹灯籠作りを始めて、3年目に入り、今までで合計550灯を製作しました。コツコツと作り続けてきた竹灯籠です。

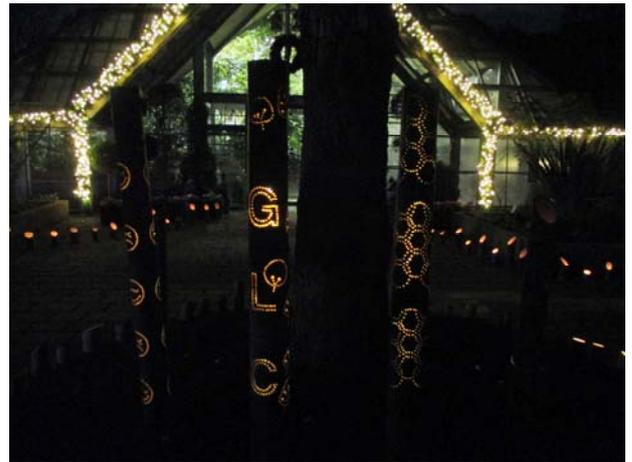
多摩中央公園班の皆さんの協力のもとに10月から週4回くらいで集まり、まずは材料集めから始まりました。

多摩中央公園の竹林(孟宗竹)を切り出し、リヤカーで4~5台分くらいの材料を集めました。

グリーンライブセンターに搬入した竹を、節のところで裁断し、上部は斜め45度に切ります。今回は200灯製作しました。

竹灯籠の灯にはじめてLED照明を導入しましたところ、見学に来られた方からも好評でした。

竹灯籠作りは、電動ドリルを安全に使いながら、子どもからご年配の方まで簡単に楽しく作れます。お好きな絵柄を竹に貼り付けて、穴を開け明かりを灯すと、見ただけで心が落ち着くような竹灯籠が出来上がります。

12月クリスマスナイト
LEDやろうそくの灯りが、竹灯籠を優しくともします

1月エコフェスタ 竹トンボで遊ぼう

竹トンボは空へ飛ばす遊び道具で、おじいさんやお父さんに幼い頃作ってもらった覚えがある人もたくさんいるでしょう。

竹トンボそのものは単純なものです、なぜか時間を忘れて没頭できる魅力を持ったもので、日本の子供の遊び道具として欠かせない存在でした。皆さんも昔、上手く飛ばせなくて自分の顔に当たって痛い思いをした覚えがあるのではないのでしょうか。

最近では竹トンボに触れたことのない子供も多くなりましたが、様々な遊び道具がある今だからこそ竹トンボに触れてその楽しさを知ってもらいたいですね。

子供には慣れていない刃物を使うので怪我をしないように気を使いながら、羽根になる部分を上手に削らないと飛びませんし、また、削り方によっては、バランスが取れずに飛びません。

お母さんも手助けしたり、ついにお父さんの出番だ。それこそ、竹との真剣勝負のように竹を削り、合わせ、飛ばす。そして、ついに完成！ 楽しい、楽しい、講座でした。

～講座紹介～

ロケットストーブ講座

多摩市グリーンボランティア連絡会 赤羽 誠 (バイオマス活用アドバイザー)

はじめに

2020年3月のロケットストーブ講座は新型コロナウイルス感染予防のため中止となりましたが、2012年7月の第1回から2019年3月の第10回まで、合計100人の参加者で74台のロケットストーブを作ってきました。今回はなぜ私がロケットストーブに興味を持ち、講座を開催するようになったかをご紹介します。

2010年、私はバイオマスの活用、特に、木質バイオマスとそのエネルギー利用に興味を持ち、バイオマスタウンアドバイザー(現、バイオマス活用アドバイザー)の養成講座を受講しました。そのような時に、雑誌「現代農業」(農村漁村文化協会発行)に掲載された記事を目にし、ロケットストーブを作ろうかと勉強を開始しました。さらに、ふくしま薪ネットが主催した講座(2011年11月27日)や京都ペレット町家ヒノコで開催された自給エネルギー講座(2012年5月16日)を受講して、日本ロケットストーブ普及協会から自主出版されていた翻訳本「ロケットストーブ」を入手し、ロケットストーブの試作をしていました。

2012年7月、第1回講座では、主要な材料である20Lのペール缶を入手するところから準備を始めて、グリーンライブセンターで参加者8組12人、8台のロケットストーブを作るところから開始しました。



ロケットストーブとは

1980年代、アメリカ合衆国のイアント・エバンスらが、発展途上国で使用することを前提とした適正技術として、ロケットストーブを最初に開発しました。日本にロケットストーブを紹介したのは、広島県の荒川純太郎氏で、2005年、アメリカ合衆国オレゴン州で訪問した家庭にあったロケットストーブに興味を持ち、英語版の簡素なマニュアルを持ち帰ってストーブの自作を始め、広島県を中心に興味を持つ人が集まり、日本ロケットストーブ普及協会が発足しました。2011年に「現代農業」にロケットストーブの連載が載り、日本で知られるようになりました。

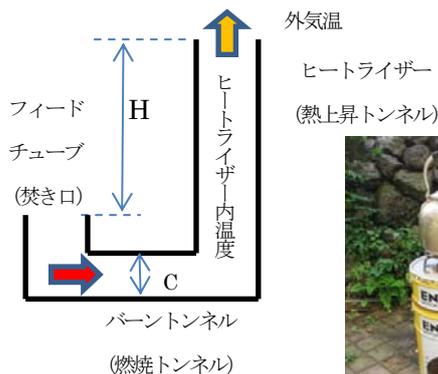
2011年3月11日、東日本大震災・福島第1原発事故が発生し、自然エネルギーやエネルギーの自給自足に関心もたれる中、広くロケットストーブが注目されるようになりました。

さらに、2011年9月、NHKで「里山に眠る“エネルギー”」(中国地方での放送で東京での放送は無かった)が放送され、この中で、エコストーブとして紹介されていたのが、ロケットストーブでした。この一連の番組をベースに2013年7月出版の藻谷浩介氏『里山資本主義 日本経済は「安心の原理」で動く』(NHK出版)に繋がっていきます。

ロケットストーブの原理

ロケットストーブの原理は、ロケットマスヒーターと呼ばれるフィードチューブ(焚き口)・バーントンネル(燃焼トンネル)・ヒートライザー(熱上昇トンネル)で構成され、フィードチューブからヒートライザーまでを断熱することで煙突効果による吸引力を高め、ヒートライザーで二次燃焼を行うことで、シンプルな構造で高効率の燃焼を実現しています。

講座では、20Lのオイル缶、ステンレス煙突、パーライトなどを材料として、キッチン用のロケットストーブを自作して、1組1台、お持ち帰りいただき、活用していただいています。



これから

広島では、「私はストーブだ in ひろしま」というイベントも開催され、自作ストーブ好きの人が集まっています。東京・多摩でもロケットストーブがオープンな技術として、広まっていくことを期待しています。

*適正技術：環境への影響、生産施設、技術の現状、労働力、市場規模、文化的・社会的環境など関連するすべての面から、開発のための技術的ニーズを満たすうえで最も適切な技術をいう。(大辞林)

～多摩市みどりのかわら版～

みどりの関わりについて考えること

多摩市立グリーンライブセンター 會田 勝康

平成31年4月から引地の後任として配属された會田です。

さて私の自宅は職場から1時間半ほど東横線白楽駅を下りて戦後の闇市を起源とする下町情緒と昭和レトロの雰囲気を残す六角橋商店街を通り、かつては市電の終点のあった大通りを渡った先にあり、生活には便利ですが、商店も住宅も戸建てもアパートもマンションもきちきちのスペースの中で混在していて緑が多く住環境の整った多摩市、なかんずく現在の勤務地、多摩センターとは全く違った環境にあります。

これまで1年近くグリーンライブセンターで森木会や恵泉女学園大学の皆様とともに各種イベント行事をはじめ様々な仕事を経験させていただきました。そして毎月の運営会議で「各班からの報告」としてお取り組み状況を伺う外にグリーンボランティア初級・中級講座などで皆様の活動を実際に目にさせていただきました。

皆様のご活動に感謝申し上げますとともにいささかうらやましく思うところでございます。

2年後の令和4年からはグリーンライブセンターの建物、庭園の大規模改修工事が予定されていますが、ハード面だけでなく、ソフト面でも様々な改善や発展等が図れる大きな節目の時を迎え、グリーンボランティア連絡会、恵泉女学園大学の皆様とお話合いができる場に私も参加する機会にも恵まれました。

表紙の絵

「モミジイチゴ」絵・内城葉子

花は白色、葉はモミジの葉のように切れ込み、実はオレンジ色。味は美味しいのですが、雑木林の手入れではトゲが痛くて厄介者です。

<プロフィール> 1949年東京生まれ。1986年国立科学博物館第2回植物画コンクール文部大臣奨励賞、1989年世界らん展ボタニカルアート部門ブルーリボン賞、英国王立園芸協会ロンドン・フラワーショーGold Medal受賞など

<所属> 日本ボタニカルアート協会、日本植物画倶楽部、どんぐり山を守る会代表

<著書> 「鏡の中-俳句と植物画」共著、2005年新風舎。他、絵本や学習図鑑などに描画。雑木林などの活動を通じ、実際の木々や草花に触れることが詳細に及ぶ精密な描写となり、植物本来の温もりを感じられる作品が特徴。

自分自身もあと2年ほどで65歳となり最終定年を迎えるなど大きな節目を前にした最後の仕事場（になると独り勝手に思っていますが）として、今この場にいることの幸せに感謝しつつ、日々の仕事に取り組んでまいりたいと思います。

皆様のお顔やお名前をなかなか覚えられず、失礼なことがあるかもしれませんが、どうぞよろしく願いいたします。



六角橋商店街。雰囲気ありますね・・・

編集後記

今年は暖冬傾向で、積雪を見ることもなく暖かくなりました。そして、あたりはすっかり桜が満開です。

調べてみると、桜の原種は約10種類とされ、その原種の桜が交配し100種以上が野生化していて、このような野生種、自生種を「山桜」と言うそうです。この「山桜」をもとに、さらに人の手で交配して作られた栽培品種、園芸品種を「里桜」といい、300種類以上もあるのだそうです。

多摩市の花がヤマザクラなのは皆様もご存じだと思います。それだけでなく、多摩市には言わずと知れた桜の名所があちらこちらにあります。私は、多摩市で過ごす季節の中では、多摩市をあっという間に春色に染める、春が一番だと思っています。

皆様も、それぞれの場所で、それぞれの春を感じてくださったらと思います。

多摩市グリーンボランティア通信

グリーンサークル37号

発行日：2020年3月25日

編集・発行責任：

多摩市グリーンボランティア連絡会 事務局

〒206-0033 東京都多摩市落合2-35 多摩中央公園

多摩市立グリーンライブセンター内

電話 042-375-8716 FAX 042-375-0087

ホームページ <http://www.keisen.ac.jp/tg1c/>